

群 教 セ	G01 - 03
	平23.243集

伝統的な言語文化に自ら親しむ生徒の育成に 向けた中学校国語科指導の工夫

— 短歌と生徒の言語生活を結び付ける

アンソロジーづくりを取り入れて —

長期研修員 宮崎 俊一

《研究の概要》

本研究は、中学校国語科の伝統的な言語文化の指導において、古典の作品と自分の言語生活を結び付ける活動を取り入れることで、伝統的な言語文化に自ら親しもうとするようになることを目指した。生徒はこの活動を通して、古典の作品と自分や現代との共通点などに気付き、理解を深めて親しみを感じることができるようになった。また、学習を生かして、古典を自分の言語生活に結び付けて楽しむ方法を見付ける活動を行った。

キーワード 【 国語—中 伝統的な言語文化 親しむ 短歌 アンソロジー 】

I 主題設定の理由

学習指導要領の改訂により、国語科では従前の「言語事項」に代わり、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が新設された。そして、古典が伝統的な言語文化の学習として、小学校段階から「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の三つの領域を通して指導するものとして位置付けられた。これは、中央教育審議会答申に示された「改善の基本方針」及び「改善の具体的事項」に基づいて、「古典に親しむ」学習が一層重視されたものである。

すでに小学校では、平成23年度より新学習指導要領が全面実施となり、教科書には古典に親しむための教材が各学年ごとに取り上げられている。特に小学校5・6年生では、竹取物語、枕草子、万葉集の和歌など中学校でも学ぶ古典が扱われている。また、先行研究における実践例についても、今まで中学校において行ってきた古典の指導に近いものとなっている。したがって、これからの中学校における国語科指導では、小学校で古典の学習を経験してきた生徒たちに対して、古典に一層親しむようにするための指導を工夫していくことが重要である。

一方で、現行の学習指導要領においても、古典に親しませることは重視されており、多くの実践が行われてきた。しかし、古典は苦手だと感じている生徒もおり、古典に親しむ態度の育成が不十分であることは、様々な実践報告からも伺える。また、実践協力校において伝統的な言語文化の学習に関するアンケートを行ったところ、「古典の学習は好きか」という質問に対して否定的な回答をした生徒が半数以上おり、古典にはあまり親しめていない現状であった。ただし、小学校6年生で学んだ六つの文語調の短歌の中から好きなものを選ばせたところ、古典の学習が好きでないと答えた生徒も、自分に身近なことを題材とした作品を選んでいった。このことから、生徒は、自分の生活や体験に関連する古典の作品に対しては、親しみを感じていることが分かった。したがって、古典に自ら親しむようにするためには、ただ、古典作品だけを取り上げてその内容を学習するのではなく、古典の作品を生徒の身近なことや体験などに関連付けた学習活動を行うことが有効であると考えられる。

そこで、本研究では、古典の作品と自分の言語生活を結び付けた学習を取り入れることが、伝統的な言語文化に自ら親しむ生徒の育成につながると考え、本主題を設定した。

II 研究のねらい

伝統的な言語文化の学習において、古典の短歌と自分の言語生活を結び付けるアンソロジーづくりを取り入れることが、古典の短歌に自ら親しむ生徒を育成することにつながることを実践を通して明らかにする。

Ⅲ 研究の見通し

- 1 導入の過程において、古典の短歌と身近にある他の詩歌や文章などを読み比べる活動を行うことによって、生徒は作品の新たなおもしろさに気づき、学習に意欲をもつことができるだろう。
- 2 追究の過程において、テーマを決め、古典の短歌と自分の好きな詩歌や文章などを組み合わせてアンソロジーをつくる活動を行うことによって、生徒は作品への理解を深め、古典を身近に感じることができるだろう。
- 3 まとめの過程において、学んだことを生かし、自分なりの古典の短歌の楽しみ方を見付ける活動を行うことによって、古典の短歌の楽しみ方が分かり、親しんでいこうとすることができるだろう。

Ⅳ 研究の内容

1 基本的な考え方

学習指導要領では、古典に親しむ態度を育成する指導が系統的に行われるように、伝統的な言語文化に関する指導事項が小学校の低学年から設定されている。したがって、「伝統的な言語文化に自ら親しむ生徒の育成に向けた指導」は、各学年の発達段階に応じて行うものである。本研究では、中学校第2学年段階の「伝統的な言語文化に自ら親しむ生徒」とは、授業での学びを基に、古典の短歌を身近に感じ、もっと知りたい、もっとよさを感じたいと思い、自ら古典の短歌を楽しもうとする生徒であるとする。具体的には、授業で学んだ作品に興味をもって他の作品を読んだり、古典の短歌を身近な所に置いて楽しもうとしたりする生徒であるとする。

生徒が、授業の学びを基に、自ら古典の短歌を楽しもうとするには、まず、生徒自身が古典の短歌のおもしろさに気づき、学習に意欲をもつことが必要である。生徒は小学校段階で、古典の短歌を含む文語調の短歌を音読や暗唱を通して親しむ活動を経験している。そこで、中学校においては、単元の導入の段階で、身の回りのことと関連付けながら、小学校で学習した古典の短歌などを見直す活動を取り入れる。古典の短歌と身の回りのことを関連付けて考えることで、小学校のときとは違う見方で作品の新たなおもしろさに気づき、学習に意欲をもつことができると考える。

次に必要なことは、生徒が古典の短歌について理解を深め、古典の作品を身近に感じるようになることである。そのためには、古典の短歌を言葉の意味から理解するだけでは不十分である。そこで、生徒が、古典の短歌について、自分のことや現代のことと関連付けながら理解を深め、作者の心情や情景を想像して楽しむ活動として、アンソロジーづくりを取り入れる。この活動を通して生徒は、作品への理解を深め、古典の短歌を身近に感じることができると考える。

さらに、生徒自身が、自分の言語生活の中に古典をどう取り入れて楽しむことができるかを分けるようにする必要がある。そこで、授業で古典の短歌を楽しんだ経験を生かし、これからも古典を楽しむことができる場や方法を見付ける活動を取り入れる。この活動を通して、自分なりの古典の楽しみ方が分かり、古典に親しんでいこうとすることができると思う。

2 短歌と生徒の言語生活を結び付けるアンソロジーづくりについて

アンソロジーとは、時代別、主題別など、一定の基準で選ばれた詩歌集、文芸作品集のことである。本研究では、古典の短歌一首に、生徒自身の好きな詩歌や文章などを二つ程度組み合わせてつくるものとする。古典の短歌の中に作者のものの見方や考え方が表れているように、生徒の身近にある詩歌や文章などの中にも、作者のものの見方や考え方が表れている。古典の短歌に自分の好きな詩歌や文章などを関連付けて考えることで、古典の短歌を自分のことや現代のことと関連付けて理解を深めることができる。したがって、アンソロジーをつくる活動は、古典の短歌に対する理解を深め、身近に感じるようにさせるのに有効な言語活動であるとする。

そこで、本研究では、図1の研究構想図にあるように、短歌と生徒の言語生活を結び付けるアンソロジーづくりを取り入れた学習活動を「古典の短歌の新たなおもしろさに気づき、学習に意欲をもつ」「作品への理解が深まり、古典の短歌を身近に感じる」「古典の短歌の楽しみ方が分かり、親しんでいこうとする」という三つのステップで行っていく。

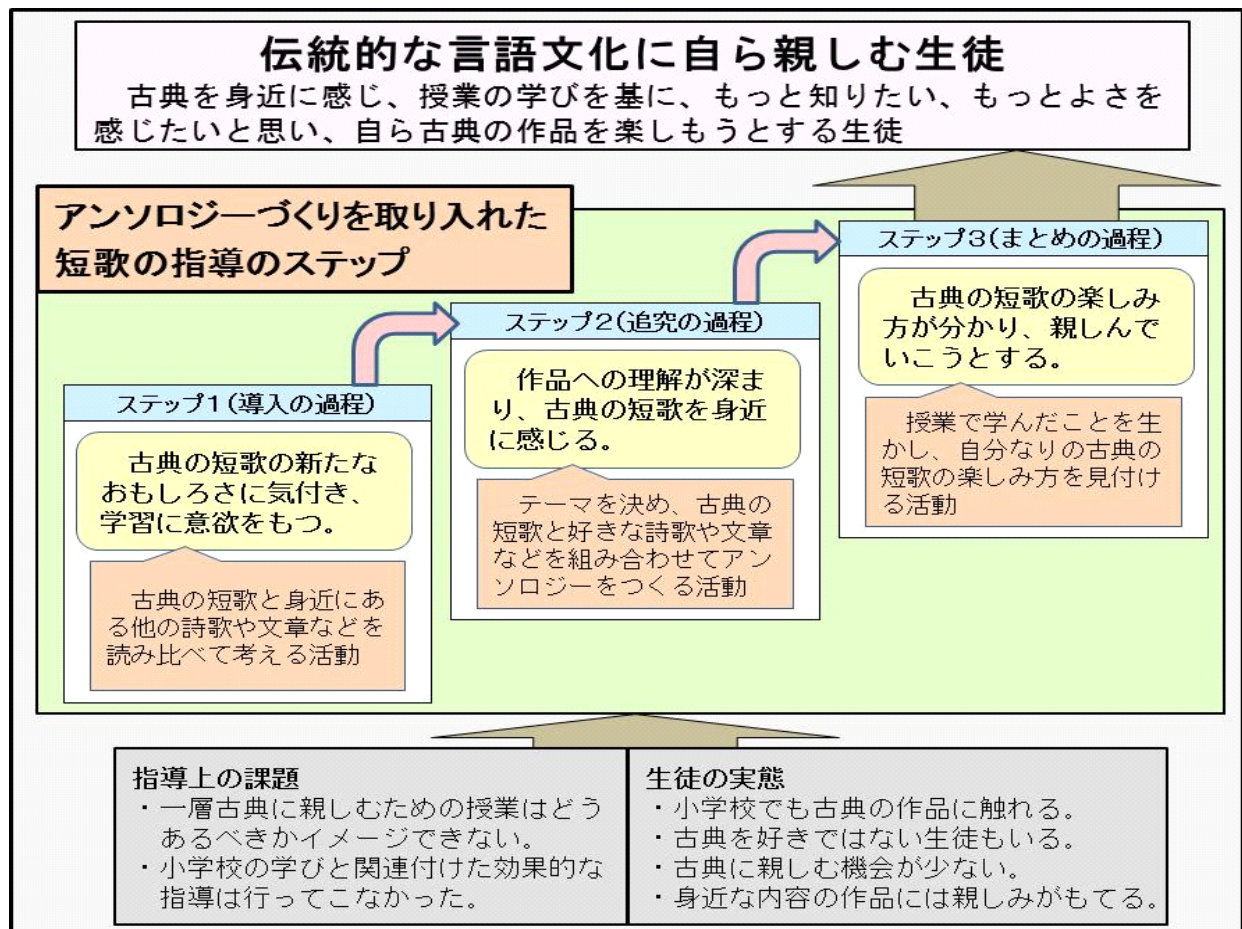


図1 研究構想図

(1) ステップ1(導入の過程)

古典の短歌と身近にある他の詩歌や文章などを読み比べる活動をする。生徒は、古典の短歌と身近にある詩歌や文章を読み比べることで、季節のよさのとらえ方や恋愛観などに時代を超えた共通する思いがあることを知り、古典の短歌に身近な詩歌や文章を関連付けて読むおもしろさに気付く。そして、古典の短歌と自分の好きな詩歌や文章を組み合わせアンソロジーをつくる活動に意欲をもつようになると考える。

(2) ステップ2(追究の過程)

古典の短歌と自分の好きな詩歌や文章などを組み合わせ、作品同士の共通点や相違点を考えながらアンソロジーをつくる活動をする。この活動により、生徒は、古典の短歌を言葉の意味から理解するだけでなく、自分の身近なことや現代のことなどと関連付けて理解を深め、作者の思いや場面の様子をより豊かに想像することができ、古典の短歌を身近に感じるができるようになる。

(3) ステップ3(まとめの過程)

アンソロジーづくりで学んだことを生かして、これからも短歌を楽しむ場や方法を見付ける活動をする。教師が楽しみ方を例示し、交流してアイディアを出し合う場面を設定することで、生徒は、アンソロジーづくりの経験を生かし、古典の短歌と他のものを結び付けて楽しむ方法を見付ける。この活動をするすることで、古典の短歌を自分の言語活動に取り入れて楽しむ方法が分かり、古典の短歌に親しんでいこうとすることができると考える。

V 研究の計画と方法

1 実践計画

対 象	中学校 2 学年	実施期間	平成23年10月13日～31日(全 5 時間)
授業者	長期研修員 宮崎 俊一	単元名	短歌を味わう

2 抽出生徒

A	文学的文章を読むことはどちらかと言えば得意である。古典の短歌を自分の言語生活と結び付けながら理解を深めることで、古典の短歌を身近に感じられるようにしたい。また、学びを生かして、自分の言語生活の中で古典の短歌に楽しもうとするようにしたい。
B	文学的文章を読むことは、どちらかと言えば苦手である。古典の短歌を自分の言語生活と結び付けて考えることで、古典の短歌に表れたものの見方や考え方を理解できるようにしたい。

3 検証計画

検証計画	検 証 の 観 点	検 証 の 方 法
見通し 1 導入の過程	古典の短歌と身近な他の詩歌や文章などを読み比べる活動を取り入れたことは、生徒が古典の新たなおもしろさに気づき、学習への意欲をもつのに有効であったか。	・活動状況の観察 ・振り返りカード
見通し 2 追究の過程	テーマを決め、古典の短歌と自分の好きな言葉を組み合わせたアンソロジーをつくる活動を取り入れたことは、古典の短歌への理解を深め、古典の短歌を身近に感じるようになるのに有効であったか。	・活動状況の観察 ・ワークシートの記述内容 ・制作物の内容
見通し 3 まとめの過程	授業で学んだことを生かし、自分なりの古典の短歌の楽しみ方を見付ける活動を取り入れたことは、古典の短歌の楽しみ方が分かり、親しんでいこうとするのに有効であったか。	・活動状況の観察 ・ワークシートの記述内容 ・制作物の内容 ・振り返りカード

4 単元の目標

古典の短歌に表れているものの見方や考え方について、知識や体験と関連付けて自分の考えをもち、古典の短歌を楽しむ。

5 授業実践(全5時間)

段階	時	○主な学習活動と生徒の様子・反応	支援のポイント
ステップ 1 (導入の過程)	1	<p>ステップ1のねらい 古典の短歌の新たなおもしろさに気づき、古典の学習に意欲をもつ</p> <p>○古典の短歌と近代の短歌、流行歌の歌詞を読み比べ、内容の共通点について考えた。</p> <p><生徒の反応> ・どの作品も働く人のことを歌っているぞ。 ・天智天皇の働く人は、残業しているサラリーマンみたいだ。</p> <p>○Lのことを歌った流行歌と比べることで、サラリーマンみたいだと気付くことができた。</p> <p>※ (現代のO.Lのことを歌った流行歌) 秋の田のかりほの庵の苫をあらみ わが衣手は露にぬれつつ 天智天皇</p> <p>息もつかず 仕事したるあとのこの疲れ 石川啄木</p>	<p>・生徒たちが親しんでいる百人一首の中から、生徒の経験や身近なことに関連する作品を提示した。</p> <p>・近代の短歌は、小学校の教科書でも紹介されていた石川啄木の作品の中から選んだ。</p> <p>・流行歌は、生徒たちがよく知っている曲を選んだ。</p>

○教師がつくったアンソロジーの見本を読み、学習課題と活動の内容を知った。

＜生徒の反応＞

- ・好きな歌の歌詞と組み合わせたい。
- ・恋をテーマにつくってみたい。

読み比べをして、組み合わせるおもしろさに気付くことができ、意欲がもてた。

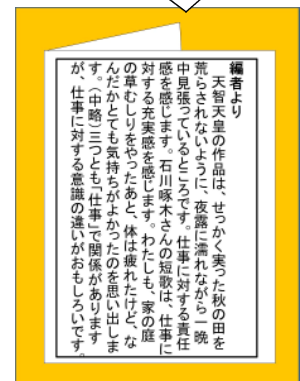
・読み比べた作品を「働く人」をテーマにしたアンソロジーとして示すことで、アンソロジーづくりのイメージがもてるようにした。

・いろいろな関連付け方があることを知らせるために、「恋愛」と「色彩表現」で関連付けしたアンソロジーの見本も示した。

関連付けの分かるタイトルと読み手に一言で思いを伝えるメッセージを書く。

アンソロジーの中心にする短歌に自分の好きな詩歌や文章を組み合わせる。

アンソロジーの編者として、どのように関連付けしたか、どのように感じたか書く。



アンソロジーの見本と説明

1

ステップ2のねらい

作品への理解が深まり、古典の短歌を身近に感じる

○教師が示した六首の古典の短歌から、アンソロジーの中心にする一首を選び、読んでおよその内容をつかんだ。

○示した六首は、生徒が自分の好きな詩歌や文章などと組み合わせ、関連付やすいように、生徒の身近なことに関連する内容のものとした。

＜生徒の反応＞

- ・作者は、亡くなった母を恋しく思っているんだな。
- ・片思いだから、逢わなければよかったと言っているんだな。

アンソロジーの中心にする短歌を選び、およその内容をつかむことができた。

a	相見ずは恋ひざらましを妹を見て もとなかくのみ恋ひばいかにせむ
b	秋来ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞおどろかれぬる
c	石ばしる垂水の上のさわらびの 萌え出づる春になりけるかも
d	桜花咲きかもちると見るまでに 誰かもここに覚えて散りゆく
e	たまゆらの露も涙もとどまらず 亡き人恋ふる宿の秋風
f	わが恋を人知るらめやしきたへの 枕のみこそ知らば知るらめ

教師が提示した六首の古典の短歌

1

○読み取ったことを「ワークシート1」に書き、同じ作品を選んだ生徒同士で小グループになり、考えを伝え合った。

○書き込みが進まない生徒には、古語の意味を詳しく伝えた。

＜生徒の反応＞

- ・とても悲しいから、少しの間も涙が止まらないんだ。
- ・お母さんのいない宿がさびしいんじゃないかな。

友達と確かめ合いながら、作品の内容について考えることができた。

ワークシート1

テーマの短歌

たまゆらの 露も涙もとどまらず

亡き人恋ふる 宿の秋風

作者 藤原定家

※たまゆら……ほんのしばらくの間も
※亡き人……ここでは作者の母のこと

○作者は、どこでどのような思いでこの短歌を詠んだのでしょうか。

○友達のかえ

2

○組み合わせる作品を自分の好きな詩歌や文章などから選び、テーマの短歌との共通点と相違点を考えながら読み比べ、「ワークシート2」に書いた。

○事前に組み合わせる作品が探せる本やWebページを紹介し準備させた。

○作業の進まない生徒には、関連付けのキーワードを示した。

＜生徒の反応＞

- ・短歌の中には言葉として書かれていないけど、わたしの好きな歌と同じような思いがあるぞ。
- ・季節のよさのとらえ方に、それぞれ違いがあるな。

作品同士を比べることで、さまざまなことに気が付くことができた。

ワークシート2

アンソロジーをつくらう

比べる言葉(その一)	相違点 共通点	テーマの短歌	相違点 共通点	比べる言葉(その二)
------------	------------	--------	------------	------------

○共通点や相違点を書いた「ワークシート2」を基にアンソロジーをつかった。

季節のおとすれのアンソロジー

一言メッセージ

あなたも季節のおとすれを感じませんか

おとすれイ けさの寒さをおどろかぬ
ふゆれれれし かきの落葉深し
(伊藤左千夫)

秋めめと 目にはやさかに 見えぬども
風の音にぞ おどろかれぬる
(藤原教行)

花がさく さながらさく だにさく
山にさく 里にさく 野にさく
(日暮あまの 高野辰之)

藤原敏行さんのは目には見えぬいけの風の音で秋が来たのだとおどろかされることを描いています。同じように伊藤左千夫さんのもけさの寒さにおどろいていることを描いています。夏の鈴なりころの朝にすこし寒いと田舎にこそ思ひ出します。

一斉高野辰之さんは目に見える季節のおとすれのことかわかります。

＜生徒の反応＞

- ・季節のとらえ方にはいろいろあるんだな。

作品による季節のとらえ方の共通点や相違点について気付いたことを書けた。

ステップ2 (追究の過程)	1	<p>○お互いのアンソロジーを小グループで紹介し合った。</p> <p><生徒の反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろなテーマでアンソロジーが作れるんだな。 ・組み合わせる作品が違っていると、同じ短歌でも違った感じがしてくるね。 <p>交流することで、自分とは違う見方があることを知ることができた。</p>	<p>○関連付け方を比較しやすいように、同じ古典の短歌を選んだ生徒同士を同じグループにした。</p> <p>○いろいろな関連付け方を知り、次時に生かせるように、参考となった関連付け方をメモするように指示した。</p>
ステップ3 (まとめの過程)	1	<p>ステップ3のねらい 短歌の楽しみ方が分かり、親しんでいこうとする</p> <p>○学習したことを基に、自分なりの短歌の楽しみ方を見付ける。</p> <p><生徒の反応></p> <ul style="list-style-type: none"> ・古典の短歌と好きな歌の歌詞を表裏にしてしおりを作ってお気に入りの本に挟みたい。 ・古典の短歌と好きな詩を書いたカレンダーを作って部屋に飾ってみよう。 <p>学習を生かして、楽しみ方を見付けることができた。</p>	<p>○具体的なアイディアを出し合いながら話合いができるように、教師が楽しみ方の例を示した。</p> <p>○小グループでアイディアを出し合った後、全体に発表させ、多くのアイディアに触れられるようにした。</p> <p>○具体的に楽しむことができるように、いつまでに、どのような形で楽しむか、計画をワークシートに書かせた。</p>

VI 研究の結果と考察

1 導入の過程に「ステップ1」として、古典の短歌と身近にある他の詩歌や文章などを読み比べる活動を取り入れたことは、生徒が作品の新たなおもしろさに気づき、学習への意欲をもつのに有効であったか。

生徒たちが親しんでいる百人一首の短歌と、その内容に関連した石川啄木の短歌と流行歌の歌詞を組み合わせ読み比べる活動を行った。次に、教師が読み比べた三つの作品をアンソロジーにしたものを生徒に配付して、アンソロジーづくりを通して古典の短歌を学習していくことを伝えた。

三つの作品を読み比べたとき生徒から、「天智天皇の作品の働く人は、残業しているサラリーマンみたいだ」「石川啄木の歌は、がんばって掃除や奉仕活動をした後みたいに充実感ですっきりした気持ちでいるけど、天智天皇の働く人は、なんかがんばってるけど、楽しそうではない」という発言があった。生徒Aと生徒Bも、発言を聞き、うなずいたり、分かったという表情をしたりしていた。

アンソロジーの見本を配付すると、生徒たちは熱心に読みながら、アンソロジーをつくることについて会話を交わすなどしていた。生徒を指名して、アンソロジーづくりをしていくことについて尋ねると、「自分の好きなミュージシャンの歌の歌詞と組み合わせたい」と答えた。

生徒Aも、熱心に恋愛をテーマにしたアンソロジーの見本を読んでいた。アンソロジーをつくっていくことについて尋ねると、「自分は、恋しい思いをテーマにしようと思う」と答えた。生徒Bは、見本に示したアンソロジーに組み合わせることができそうな自分の知っている流行歌の曲名を挙げながら、席が近い生徒と会話をしていた。

授業後、昔の短歌と他の詩歌や文章を比べることで、前よりも昔の短歌に興味をもつようになったか質問すると、96.7%の生徒が肯定的な回答であった(図2)。また、アンソロ

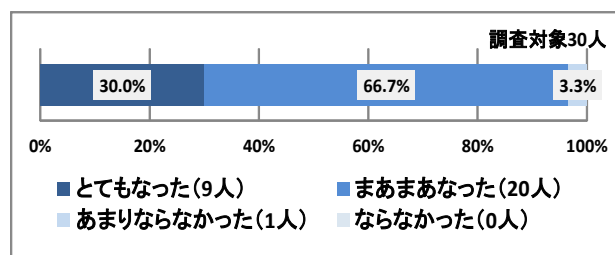


図2 昔の短歌に興味をもつようになりましたか

ジーづくりをすることに意欲がもてたか質問すると、80.0%の生徒が肯定的な回答をした(図3)。

読み比べる活動をしたときの、「天智天皇の作品の働く人は、残業しているサラリーマンみたいだ」という生徒の発言は、現代の働くOLのことを歌った流行歌と比べた見方によるものである。また、「石川啄木の歌は、がんばって掃除や奉仕活動をした後みたいに充実感ですっきりした気持ちでいるけど、天智天皇の働く人は、なんかがんばってるけど、楽しそうではない」という生徒の発言も、石川啄木の短歌と天智天皇の短歌を比べた見方によるものである。いずれも、ただ単に古典の短歌だけを読むのではなく、自分に身近な作品と組み合わせる読む活動をしたことでできたものである。この活動をしたことで生徒たちは、古典の短歌に身近な詩歌や文章などを組み合わせる読むおもしろさに気付き、「自分の好きなミュージシャンの歌の歌詞と組み合わせたい」「自分は、恋しい思いをテーマにしようかなと思う」といったようなアンソロジーづくりへの意欲がもてた。

以上のことから、導入の過程に「ステップ1」として、古典の短歌と他の詩歌や文章などを読み比べて考える活動を取り入れたことは、生徒が古典の短歌の新たなおもしろさに気付き、学習に意欲をもつのに有効であったと考える。

2 追究の過程に「ステップ2」として、テーマを決め、古典の短歌と好きな詩歌や文章などを組み合わせるアンソロジーをつくる活動を取り入れたことは、生徒が作品への理解を深め、古典の短歌を身近に感じるのに有効であったか。

教師が提示した六首の古典の短歌から、アンソロジーの中心にする一首を選び、読んで分かったことを「ワークシート1(P6)」に書いた。次に、中心にする短歌と組み合わせる作品を生徒それぞれが自分の好きな詩歌や文章などから探し、「ワークシート2(P6)」に書き出して共通点や相違点を読み比べる活動をした。そして、「ワークシート2」を基に、アンソロジーをつくった。

「ワークシート1」の生徒たちの書き込みを見ると、「片思いだから、逢わなければよかったと言っている」「若いわらびだから、春の感じがする」といったような口語訳の内容に触れたものがほとんどであった。生徒Aは、「お母さんが死んで悲しんでいると思う」と書いてあり、生徒Bは書き込むことができていなかった。

「ワークシート2」の書き込みを見ると、生徒たちは、「逢わなければよかったと言いながら、好きでたまらないというところがわたしの〇〇の歌の歌詞と共通している」「わらびの横には草野心平さんの詩みたいにカエルがいたり、花が咲いていたりするかもしれない」など書いていた。そして、「ワークシート2」を基にアンソロジーの「編者より」(資料1)を書くなどし、アンソロジーをつくっていた。「編者より」の内容を見ると、共通点や相違点について自分の考えが書けた生徒が96.2%(30人中29人)、さらに作者の思いについて自分の考えが書けた生徒が70.0%(30人中21人)であった。

生徒Aは、「ワークシート2」に「(藤原定家も母の)声や温もり、ほほえみを思い出しているのではないかなと思う」と書いた(資料2)。

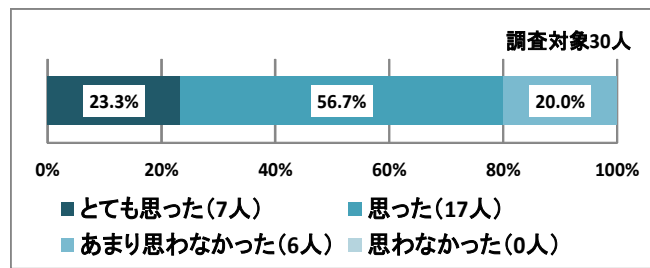


図3 アンソロジーにする学習をやってみたくて思いましたか

資料1 生徒たちの「編者より」から抜粋

・昔も今も片思いをしている女性の気持ちは同じだと思いました。自分の好きな歌の歌詞と同じように、古典の短歌にも、まさに、自分の気持ちが歌われているような気がして、共感できました。

・草野心平さんの詩は、春を水、風、カエル、におい、花、空で表現しています。比べてみて、短歌の春の情景も、同じようににのいや空や風も想像することができました。

資料2 生徒Aの「ワークシート2」から抜粋

比 べ る 言 葉 そ の 2	共通点・相違点	亡き母のこを思ふ流行歌の歌詞の一部	テーマの短歌 たまゆらの露も涙もとどまらず 亡き人恋ふる宿の秋風
※亡き母のこを思ふ流行歌の歌詞の一部	共通点・相違点	<p>・自らの母親が住んでいた宿に、自ら足を運び、涙をこぼしている姿から、へ比べる言葉(その2)の歌詞のように、声や温もり、ほほえみを思い出しているのではないかなと思う。</p> <p>・どちらも同じことを思っている。</p> <p>・どちらも亡き人を近くに感じているのでは?</p>	

秋という共通点で古典の短歌と自分の好きな歌の歌詞と関連付けたことにより、秋についてそれぞれの作者の視点に違いがあることに気付けたことがきっかけになっている。

以上のことから、テーマを決め、古典の短歌と好きな詩歌や文章などを組み合わせてアンソロジーをつくる活動は、生徒が作品への理解を深め、古典の短歌を身近に感じるのに有効であったと考える。

生徒たちは、「恋の短歌と好きな流行歌を表裏にしたしおりを作りたい」「好きな短歌とそれに合った風景の画像を組み合わせ壁飾りを作りたい」などのアイディアを出し合った。そして、出し合ったアイディアを参考に、各自が古典の短歌を楽しむ計画を立てて、部屋に飾るためのカレンダーや、お気に入りの本に挟むためのしおりなどを作ることができた（資料4）。

編者より
 「今、逢えない人を思う気持ち」をテーマに、アンソロジーをつくってみました。
 藤原家さんの作品は、母を亡くした秋に、母が住んでいた宿を訪れて詠んだ作品だといわれています。定家さんの想いとほとんど一致していると思えました。母親の住んでいた宿に、自ら足を運んでいる姿から、「△△△△」の歌詞のように、母親を思い描き、声や温もり、優しい微笑みを思い出しているのではないかと考えただけです。
 (中略)
 みなさんも、たくさんのお会いと別れの中で、忘れられない思い出となった時間や、そんな時を共に過ごした人はいませんか？
 自分たちの大切な人たちが思い出になる前に、気付いて大切にしたいと思います。

事前に文語調の短歌について親しみやすいか聞いた質問（図4）では、否定的な回答をした生徒が86.7%であったが、事後に自分なりの方法で短歌に親しんできたいと思うようになったか聞いた質問（図5）では、全員が肯定的な回答をした。

生徒Aは、友達のアイディアを生かし、古典の短歌に好きな流行歌の歌詞を表裏にしたしおりにイラストを付けたものを作った。生徒Bは、アンソロジーをパズルにしようか、壁掛けにしようか悩んだが、自分の好きな古典の短歌のしおりに作ることにした。

授業後の生徒の様子を見ると、実際に国語の教科書に作ったしおりを挟んだり、アンソロジー風のブックカバーを作って教科書に付けたり、アンソロジーをラミネートで加工して下敷きにしたりして楽しんでいる姿が見られた。生徒Aも生徒Bもしおりを自分のお気に入りの本に挟んで楽しんでいた。これは、まとめの活動で、身近に古典の短歌を置き、いつでも見ることができる形にしたことが、楽しめることにつながったものと考ええる。

以上のことから授業で学んだことを生かし、自分なりの古典の楽しみ方を見付ける活動を取り入れたことは、古典の短歌の楽しみ方が分かり、親しんでいこうとするのに有効であったと考える。

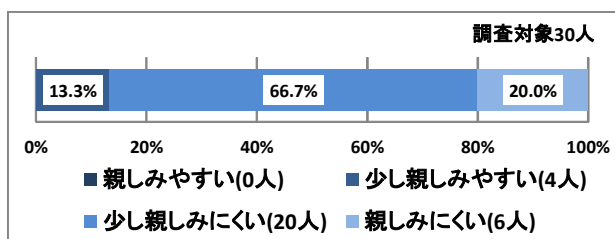


図4 文語調の短歌は、親しみやすいですか

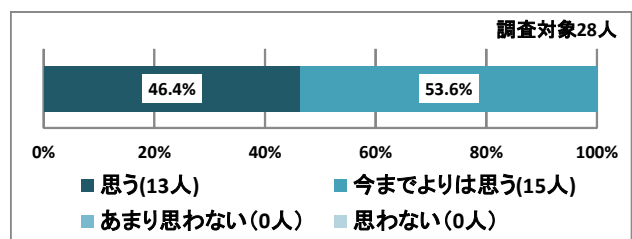


図5 昔の短歌に親しみたいと思うようになりましたか

Ⅶ 研究のまとめ

1 成果

- 導入の過程において、どの生徒にも共通点が見付けやすいように、読み比べる作品を吟味することで、新たなおもしろさに気付かせ、学習に意欲をもたせることができた。
- 追究の過程において、生徒の好きな詩歌や文章の中からキーワードを示すことにより、どの生徒も共通点や相違点を見付けることができ、作者の心情や情景などをより豊かに想像するなど理解が深まり、古典の短歌を身近に感じる事ができた。
- まとめ過程において、古典の短歌をカレンダーやしおりなど、自分の身近に置いて使えるものを作ったことで、生徒自身がこれからも古典の短歌に親しんでいこうとすることにつながった。

2 課題

- アンソロジーとして組み合わせる自分の好きな詩歌や文章を見付けるのに時間がかかる生徒もいた。事前に生徒たちの言語生活の実態をより詳しく把握し、生徒が古典の短歌に組み合わせやすい資料を十分に準備する必要がある。
- 今後も、継続して古典の作品に親しんでいけるように、古典に関連した書物やWebページを紹介するなど、古典の楽しみ方に関する情報を生徒の身近に用意しておく必要がある。

<参考文献>

- ・村田 伸宏・「群馬・国語教育を語る会」 著 『国語の力』 三省堂(2011)
- ・岩崎 淳 著 『古典に親しむ』 明治図書(2010)

(担当指導主事 新井 俊一)